第８章　京都大学北部構内の地形復原
――縄文時代から弥生時代――

泉拓良

京都大学北部構内は，北白川扇状地の末端に位置し，縄文時代から平安時代の京大農学部構内遺跡として全体が周知の遺跡となっている〔京都市文化観光局文化財保護課77〕。北部構内は現在，北西方向に緩やかに傾斜する起伏の少ない地形である。標高71ｍの北部構内東端から約100mは勾配1,000分の40でやや傾斜をなし，そのほかの地域は勾配1,000分の10の緩斜面である。北部構内西端は標高約60ｍである(図版16)。

昭和47年以降の発掘調査の結果(図版16)，同一性質の層位を面として追うことができるようになった。さらに出土した遺物によって，各層位が堆積した年代を，大まかではあるが同定できるようになった。また弥生前期以前の遺物を包含する黒褐色粘質土層が地表下2～3ｍで検出できる地点と，地表下１ｍ弱で縄文時代の遺物が出土する地点とがあることが判明した。地表下２～３ｍで検出できる地点は，必ずこの層の上に厚さ１～２ｍの黄砂層がある。以上のことから，弥生前期以前の地形は現在よりも起伏に富んだ地形をしていて，その後の黄砂層の堆積によって現在に近い地形になったと考えている。

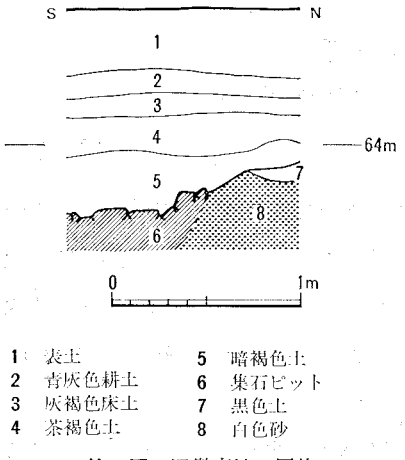
白川は現在銀閣寺から南流しているが，かつては白川は西へ向って流れ北部構内の南端をかすめて本部構内に流れていた〔池田・石田73，藤岡74〕。北部構内の発掘調査からもこの説を補強する資料が出ている。北部構内の地形の変化はこの旧白川の侵食と堆積によるものである。

１　北部構内の層位

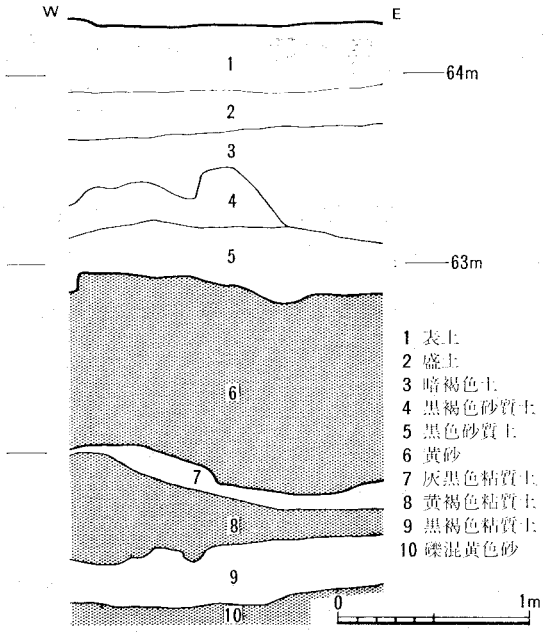
北部構内は層位の異なる２つの地域に大別できる。それは，各時代の層位が整合によく残っている旧後背低地と河道跡の地域と，古墳時代以後数回にわたって削平を受けた扇状地上の旧微高地の地域とである。

旧後背低地と河道跡の地域の層位は全域でよく対応する。しかし西へいくほど黄砂層より上の層位は薄くなる。また同時に，弥生前期以前の層位は黒褐色から黄褐色に変化し，あいだに砂層を含むことが多くなる。

第37図は図版16－③地点の層位である。第１・２層は大正時代以後，第３層は鎌倉～室町時代，第４層は平安末～鎌倉時代，第５層は古墳後期～平安後期の堆積で，第６層は水成層で弥生中期以後，第７層は縄文晩期末～弥生前期，第８層は水成層で縄文後期後半～



第36図　旧微高地の層位



第37図　旧後背低地の層位

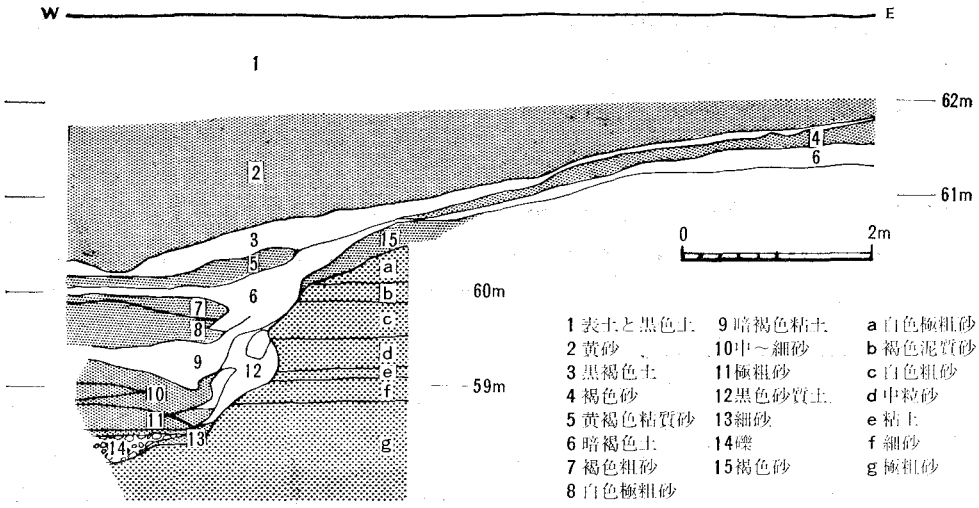
晩期，第9層は縄文中期後半～後期前半に堆積したものである。水成層と述べなかった層位は陸成層である。第9層から第7層までの変化は漸移的である。第7層から第6層へも，粘土から極めて細かい砂，細砂という順に変化している。これは緩やかな流水が徐々に水位をあげて当地が水没した過程を示している。ただし，第6層(黄砂層)中には粗い黄色砂の部分もあり，また旧微高地地域にも黄砂層が残っているところがあるので，第6層の一部は洪水による堆積と考えている。

扇状地上の旧微高地地域の層位は，旧後背低地の層位と異なって一様でなく，各地点によって残っている層位の年代がまちまちである。

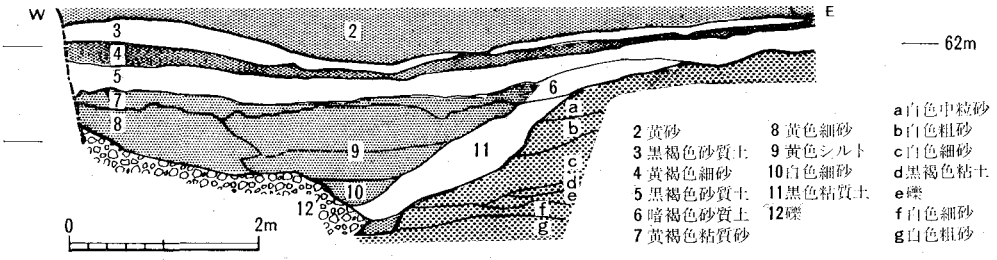
第36図は図版16－⑥地点の層位で，第1層は大正時代以後，第2・3層は江戸時代～明治時代，第4・5層は室町中・後期，第6層は鎌倉末～室町中期，第7層は縄文中期末・後期初頭にかけての堆積である。この地点でも平安前・中期の遺物が出土していることから，鎌倉末頃の削平によって第37図の第4・5層にあたる層位が破壊されてしまったと考える。第36図の第6層と第7層のように，縄文時代と歴史時代の遺構や包含層を同じ高さで検出することが，この地域では多い。また旧微高地地域にも黄砂層が検出できる地点もあって，洪水時には水をかぶった可能性がある。

2　後背低地と微高地の形成

河道跡・後背低地と微高地がどのように扇状地上に形成されたかは，京大追分地蔵遺跡



第38図　河道と後背低地の関係を示す層位



第39図　縄文時代に埋積した河道

BA30区(図版16－⑬)の発掘調査で明らかになった(第38図)。a～g 層が水平に堆積していた扇状地を旧白川が侵食して崖面を形成した。第14層は当時の河道に堆積した氾濫による礫層，第12層はこの侵食のあと地表をなしていた時代の腐植土層，第11･10層は水成層である。第９層は陸成層で縄文後期，第８・７層は水成層，第６層は陸成層で縄文後期である。この時期に旧河道はほとんど埋積し後背低地と化す。第５・４層は水成層で，かなり高い所まで水没したことを示している。第３層は弥生前期の堆積で，この時期には斜面は陸地となっており，低地は標高 60m 位まで水没していたであろう。弥生中期以後かなり長期間水没して，第２層(黄砂層)が厚く堆積し，後背低地は埋積してしまうのである。

京大農学部遺跡 BE33 区(図版16－②)でも，すでに縄文時代には埋積した旧河道を検出した(第39図)。その層位は基本的に BA30 区(第38図)と同じである。第６・５層は縄文中期末～後期前半，第３層は縄文晩期末～弥生前期に堆積したものである。花粉分析による

と第３～７層からは常緑広葉樹の花粉が多く，第11層では落葉広葉樹が多いという〔京大埋文年報77 p. 37〕。したがって第11層は縄文前期以前に堆積した可能性が強い。２枚の黒色土層を含む比叡平の埋積谷の下刻を氷河時代とするならば〔池田・石田73〕，北部構内の旧河道の下刻を氷河期とすることが可能である。弥生前期の微高地は旧白川による侵食から取り残された古い扇状地で，同時期の後背低地は旧後背低地と埋積した河道跡からなっている。この旧河道は縄文中期後半頃までには埋積して，弥生前期とほぼ同様な地形になったと考えている。

3　北部構内弥生前期の地形復原

縄文中期後半から弥生前期にかけては，侵食と堆積が少なかった時期で，地形に大きな変化はない。発掘調査によって検出した包含層の中で，もっとも面として追いやすい層位が弥生前期の黒褐色粘質土層である。また２地点でこの時期の地形測量を行なっていることから，弥生前期の地形を復原し，縄文中期後半から弥生前期の地形の代表とする。

200分の１の測量図をもとに作成した600分の１の京都大学北部構内高低測量図に，発掘調査を実施した地点を記入した(図版16梨地の地点)。弥生前期の標高と，２地点の地形測量図を地図上の各地点に記入し，等高線作図の資料とした。また黄砂層下の粘土層がみられない幅約35mの図版16－A地点を当時の河道とし，図版16－B地点の南側と図版16－⑬地点の西側に河道を推定した。図版16薄紫紙に示した等高線は以上の資料をもとに作成した弥生前期の地形である。ただし，発掘調査資料の少ない北部構内の北部と東部の地形は，現在の地形にしたがって表わした。

弥生前期の微高地は，北部構内の中央を東西に走る道路を中心とする地域と，その北西端が図版16－⑬地点である地域とである。北部構内から150mほど東にある北白川小倉町遺跡においても，調査地域の南側で縄文前期と後期の包含層の上に黄砂層が堆積している。その黄砂層は南へいくほど厚くなる〔梅原35〕。したがって中央の微高地はまっすぐ東に延びて北白川小倉町遺跡の地に続いていたといえる。南の微高地は吉田山へと連なっていくもので，吉田山では弥生前期の太型蛤刃石斧が出土している〔横山・佐原60〕。

後背低地地域のうち図版１－①・⑧・⑫地点では縄文時代や弥生時代の植物遺体が良好に残っていた。①地点は旧白川の後背湿地，⑫地点は北側を流れていた旧白川の分流の後背湿地，⑧地点は旧白川の分流が南流した地点の後背湿地であったと考えている。②・③・④地点の北側の急な斜面は，第39図で示した旧河道の攻撃面で，南側の平担面は河道跡である。

4　地形復原よりみた遺跡の立地

弥生前期の地形を基にして，それと縄文時代と弥生時代の遺物が出土した地点から，各時期の遺跡の立地を推測してみる。縄文中期前半より前の時期の遺物は，図版16－①～⑦・⑫地点(以下本節では地点名の前の図版16は省略する)で少量出土している。縄文中期後半の船元Ⅳ・里木Ⅱ式は③～⑤・⑦地点から多く出土し，そのほかの地点からはほとんど出土していない。縄文中期末～後期初頭の遺物は③～⑧地点で多く出土し，②・①・⑩地点で若干出土した。後期前葉の遺物は甕棺・配石遺構を検出した①地点がもっとも多く，⑬・②・③地点でも出土している。後期後半と晩期前・中葉の土器は現在のところ，北部構内では，まったく出土していない。晩期末の突帯文土器は①～④・⑧・⑬地点で出土しているが，比較的まとまった資料は②地点の土壙から出土したものだけである。弥生前期畿内第Ⅰ様式(中)の土器は⑬・③地点で数片ではあるが出土している。畿内第Ⅰ様式(新)の土器は⑬地点でまとまって出土し，①～④・⑧～⑪地点でも小量出土している。

以上の資料から当時の生活の場を復原する。船元Ⅳ・里木Ⅱ式の時期には，住居は③・④地点の北側の微高地上のあまり広くない地域にあり，中期も終わりに近づくと，急激に集落が大きくなって，③・④地点北側の微高地一帯に拡がったようである。ただし弥生前期の標高64mの等高線より東へは拡張しなかったと考える。後期前葉には集落全体が東のやや高い所へ移動し，住居は①地点の北ないし北東の微高地上にあった。そして，墓地と祭場を，やや入りくんだ後背低地の①地点に作った。この集落は後期中葉北白川上層式の時期になると，東の北白川小倉町遺跡と南の京大教養部遺跡へ移る。縄文晩期末には，①地点と同様の後背低地の②地点に墓地が作られる。この時期の住居をどこに推定するかは資料不足である。弥生前期の集落は⑬地点の南東の微高地にあったと考える。縄文晩期末と弥生前期の土器が，後背低地で⑫地点を除くほとんどの地点から出土している。このことを，後背低地の積極的な利用と結びつけるか，単なる二次堆積の結果とするかは今後の課題である。以上のように縄文中期後半から弥生前期まで一貫して住居は微高地上にあり，墓地は後背低地でやや微高地にくい込んだ平担な所に作られる傾向がある。

5　まとめ

北白川扇状地は，弥生前期の地形からみて，縄文時代と弥生時代には，2つの河川と3つの微高地からなっていた。北部構内のすぐ北に旧白川の分流があって，その北に微高地があったと考えている。北の微高地には，縄文中期末の住居址と縄文早期と後期の遺物が出土した北白川上終町遺跡〔梅原35〕がある。北西端が北部構内にかかっている南の微高地

の南西斜面には，縄文中期末と後期，弥生前期と中期の遺物が出土した京大教養部遺跡〔藤岡73〕が立地している。したがって北白川扇状地のすべての微高地が生活の場となっていた。このような扇状地の利用のしかたは福岡県までたどることができる。しかし墓地の立地については明らかに九州地方とは異なっている。

京都大学北部構内の旧後背低地の堆積にみられる黒色土層と黄砂層の堆積時期は，白川の水源地帯である比叡平周辺が植生におおわれた時期と，侵食と堆積が進む時期とに対応するという〔池田・石田73〕。縄文後期後半以後で，黄褐色粘質砂層や黄色砂層が堆積する時期は，人々の生活の痕跡を現在のところ検出していない。この時期には洪水が多く，とうてい人々の棲める所ではなかったのであろう。

花粉分析によると，縄文中期後半以後弥生前期は常緑ガシが多く，温暖であった〔京大埋文年報77 p. 37〕。基本的な景観は森林であるが，図版16－②地点では踏み跡群落の指標植物であるオオバコの花粉が出土している。ほかの地点で行なった同時期の花粉分析の結果，花粉の基本的構成は①地点と同じであるが，若干異なるものもあることが判明した。この相違は，地形の復原や住居址と墓地そのほかの遺構の配置と合わせて，当時の生活空間を復原する時に，よい資料となる。

地形復原は遺跡を全体的に理解する基礎資料であるだけでなく，まだ調査を行なっていない地域の遺跡を推測することによって，遺跡保存を進めるうえで非常に重要な資料となる。今後このような作業を基に，試掘調査を資料の少ない地点で行ない，本章の地形図を各時代ごとの精密なものとする予定である。

本章を書くにあたって，前調査会長横尾義貫先生に多大な御教示を頂き，理学部地質学鉱物学教室の石田志朗助教授から貴重な資料と助言を頂いた。

なお，本章は以下の京都大学構内遺跡調査の概要報告書をもとに作成した。

〔石田・中村72〕〔中村73，74a，74b，75〕〔京大埋文年報77〕